



連載 I  
あの町この町  
第55回

## トツクのほとり——北海道・新十津川町

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀  
(イラスト―著者)

JR新十津川駅に降りると、トントコ、トントコと太鼓の音がする。無人駅の駅舎と線路のあいだの花壇の前で、赤いハッピをはおった若い女性が四人、それに小さな女の子二人と男の子二人が手拍子たたくて踊っていた。札幌発・新十津川到着は午前二便、午後と夕方各二便で計四便。午前の二便には近くの保育園の幼児たちの踊りが迎えてくれる。そのうえ手づくりの絵葉書をいただいた。

「終着駅のある新十津川へ／またいつか笑顔で会える／その日まで……」

一輛きりの電車と朝顔の絵がそえてある。

スレート葺きの小さな駅舎の前はゆったりとした広場で、まっ赤な花がとり巻いている。緑の繁みが美しい背景をつくっていて、まさに一幅の絵のようだ。しげしげながめっていると、歓迎踊りの女の子が保母さんといっしょに走ってきた。たどたどしい舌を保母さんに通訳してもらおうと、「おじさんは どこから こられたのですか?」「東京」と答えると、女の子はころげるように走り出した。地名を書いたカードが用意されていて、お目あてを見つけてくるので、しばらく待っていてほしいとたのまれた。おやすい御用であつて、保母さんと立ち話をしていたら、またもや、ころげるように走ってきた。手に握った紙の札に「とうきょう」とある。「アタリ!」というのと、びはねながらもどつていく。なにやら

お伽の劇に立ち会ったかのようなのである。

広い道路が直角にのびていて、一方に病院、もう一方は役場の標示がついている。さしあたり役場に向かった。古風な赤レンガの倉庫に「ピネ農業協同組合」とあつて、下に消し跡があるのは、近年に改称されたものか。裏手の大きな新しい倉庫は「ピネ農業協玉ねぎ集出荷貯蔵庫」。さらに「昭和五〇年度稲作転換促進特別事業」とあつて、コメから玉ねぎに転換する際の特別交付金で生まれたのだろう。べつの建物には入口に「平成10年度／農業生産体制強化総合推進対策事業」、また「ピネ農協 土壌診断施設」、加えて「ウルグアイ・ラウンド農業合意関連対策」が四角で囲つてある。ウルグアイ・ラウンドは目下、農業関係者には大問題のTPPの前身にあたり、日本の農業、とりわけコメが国際化の荒波にさらされた最初のケースである。稲作からの転換には土質を変えなくてはならず、そのため土壌診断部門がつけられた。世事にうとい人間が、のんびりと北の町を歩くつもりが、いや応なく世界の動向にかかわってくる。

役場の前の小さな繁みに立派な石が据えてあつて、「望郷の碑」と刻まれていた。いつさいの文言を省いて、ただ「望郷」とだけあるのが、なおのこと思いの深さを忍ばせる。新十津川町は名前の示すとおり、明治の半ばごろ奈良県十津川村の人々が当地にうつつて村づくりにかかつた。

たところなのだ。

役場の北どなりが改善センターと物産館、東どなりが警察、その向かいが農業高校。行政の中心にあたるのだろう。警察を通りこしてしばらく行くと、木立ちごしにチラリと開拓記念館の赤レンガがのぞいた。となり合って、やや小振りのレンガ造りがある。

十津川村は奈良県の最南部にあつて、吉野熊野山地の一角にあたる。山は高く谷は峻しい。十津川本流が激しく屈折をくり返しながら下っていく。集落はV字谷の斜面にあつて、人ひとりやつとの道が通じていた。明治二十二年（一八八九）八月、当地を古今未曾有の豪雨が襲った。当時、十津川郷は六村から成り、戸数二千四百あまり、人口二万二千余。豪雨は暴風をとめない、雷さえまじえた。山谷はいたるところで地すべりを起こし、溪流をせきとめ、湖水をつくった。そのせきが崩れ、濁流がドツと下流域を襲った。死者一六八人、家屋の全壊・流失はおびただしく、耕作地の多くが失われた。

単なる水害ではなく、生活圏である谷壁が崩壊しており、再建はおぼつかない。ハワイ移住、奈良・大台ヶ原、福島・阿武隈川上流域開拓などが討議され、最終的に北海道移住が決まった。応じた家族は六百戸、二四八九名。十月半ば、第一回移民団が発発。大阪・八軒屋に集まり、列車で神戸、船で小樽。北海道庁は受け入れにあたり「石狩国樺戸郡トック」入植を決めており、とりあえず石狩川流域に建設中の屯田<sup>よんでん</sup>兵屋に仮入居させた――。

資料とパネルからも、入植直後の過酷な生活がうかがわれる。北海道はすでに冬であつて、寒さが厳しい。戸数が足りず、一つの仮兵屋に四戸が同居した。入浴するにも風呂がない。そのころ世界的にスペイン風邪が流行していて、かなりの死者が出た。「道庁にだまされた」と不満を訴え、帰郷を言い出す人もいた。

資料の一つに「移民誓約書」があつた。十津川郷士の誇りをもって千



開拓時代の生活具と十津川郷士の旗（上・右はし）

辛万苦に耐え、励まし合い、助け合つて開拓を成功させようと連署した。新十津川村を誕生させたのは、何よりも強烈な郷土精神だった。

割りあてられていた土地は、石狩川に支流トック川が合流する原野で、湿地帯がかなりあつた。抽選により入植地を決定。ひどい土地を引きあてた場合、代替地の申請ができた。



第二の故里づくり・ふるさと公園

「ふるさと公園」に力を入れており、農業記念館はもはや表舞台から退いたのだろう。  
車で十分あまりの郊外に新しい「ふるさと」が誕生した。ピンネシリの山並みのはじまる裾野に、グリーンパークしんとつかわ、サンヒルズ・サライ、ケビン村VILLA徳富、青少年交流キャンプ村、室内

翌年六月を待つて開墾に着手。木を切り倒すのは、山村十津川で鍛えていたのではなかったが、耕作、植えつけに苦勞した。初年度の収穫はソバと大根だけ。それがいまや道内屈指のコメどころになっている。気がつくると二時間あまり展示物に見入っていた。

畑作から稲作への転換に「夜盗虫」がはたらいたとは、多少とも皮肉である。道庁は水稲は無理としていたが、ひそかにつくる人がいた。明治三十年（一八九七）、夜盗虫が大発生して、村の主要作物だった亜麻が全滅。わずかにつくられていた水稲は被害を受けなかった。これがきっかけになって、本格的なコメづくりが始まった。大正四年（一九一五）

は開村二十五周年にあたるが、戸数二四三二、人口一万四七〇九人、田畑八七二〇ヘクタールとある。このころ村は全域にわたり、ほぼ開拓しつくされていた。トック川には「徳富」の字があててあるが、四分の一世紀の労苦にあつて、誇らかに徳と富の二字を掲げる資格があつた。

空中写真に見るとおり、全地域が整然とした碁盤目に区切られている。大和、中央、里見、弥生……。字名にも、こめられた思いがあつてのことだろう。石狩川をへだてた滝川市は、旧十津川村の字滝川にちなんでつけられたにちがいない。故里を平地に拡大してひろげたぐあいだ。

となりの赤レンガに「新十津川町農業記念館」の看板が下がっている。鍵のかかったドアのガラス越しにのぞきこんでギョッととした。隅に黒板と金庫、机が並び、背広・ネクタイの人が黙々と執務中。ただ微動だにしないのが異様である。

すぐに蠟人形だとわかったが、あまりに精巧につくられていて恐いくらいだ。白いワイシャツに黒い袖カバーの人は会計掛のようでソロバンを握っている。奥の窓ぎわ、鼻ひげの人がトップのようだ。どうしてわざわざ十体ちかくも蠟人形をつくり、執務室を再現したのだろうか？ 隣室が展示室のようだが、すでに長らく閉鎖されているらしく、人形事務官の上着にうっすらとほこりがつもっている。新十津川町は

パークゴルフ、文化伝習館、温水プール……、アリーナやランニングコースをそなえたスポーツセンター、サッカースタジアム、道内最大の登り窯をもつ陶房もある。健康増進、疲労回復、美容、スポーツ、合宿、交流、教養、歴史。広大な敷地と施設は、それ自体が新十津川町というものだ。かつて屯田兵屋で、寒気と将来の不安にふるえていた第一世代には、まさに夢を見ているこちで、頬ぺたをつねりたくなるのではなからうか。

あらためて勉強したが、当地高品質米は「ゆめぴりか」「ななつぼし」という。主役のかたわらにメロン、ミニトマト、シイタケ、タマネギが並んでいたのは、しずかに稲作転換がすすんでいるからだろう。開村十数年で酒づくりを始めた人がいて、いまや道内トップの酒米と石狩川の伏流水で押しも押されぬ蔵元に成長した。「瑞鳳」「白鳳」など奈良朝を連想させる銘柄のつけ方に、開拓魂がしのばれる。

新・新十津川は、あくまで町の人のためのふるさとで、よそ者はよその座敷に入りこんだようで落ち着かない。旧・新十津川にもどって思案した。お昼すぎの新十津川発を見送るなら、夜の七時台まで帰りの便がない。旧国鉄札沼線は札幌と留萌本線・石狩沼田間を結ぶ路線として、昭和十年（一九三五）に開通。新十津川駅は中間駅だったが、昭和四十七年（一九七二）に新十津川～石狩沼田間が廃止され、新十津川駅は終着駅になった。時刻表に札沼線（学園都市線）とあるのは、名ばかりの名称に対して、沿線に大学がつきつきに生まれた事情がとってかわった。ただし、学園が及ぶのも途中の浦臼までで、その先から終着まではプツリととだえる。

JRからすれば、すぐ川向こうの滝川駅は函館本線の主要駅であり、ひとつ走りしてそちらを利用したいということだろうが、開村のコースをたどってやってきたからには、同じ経路でもどりたい。それにタクシーも見あたらないのだ。夜の便まで待つのは、かなりの勇気がある。新・

新と旧・新を問わず、町はあくまでも町民本位につくられていて、よそ者を想定していないのだ。

「ウルスト……よしだ……」

小さな看板が目にとまった。ウルストはドイツ語で「腸詰」の意味。ハム、ソーセージをいうのに使われる。ドイツ語などまるきり予測して、頭が受けつけない感じで、納得するのにひまがかかった。よく見ると看板に「手作りハム・ソーセージ」とそえられている。役場の裏手、道道275号沿いの小さなお店である。ガラス戸を押して入ると、わが愛するロースハム、ローストポーク、ピアシンケン（ハムの種類）、「狩人のソーセージ」ことヤークトウルスト、チーズウルスト、赤チョリソー、おなじみのフランクフルターにミュンヒナーウルスト。商品に札がついていて「ドイツ風焼くソーセージ」もあるではないか。北のコメどころにドイツのお店がひそんでいた。

先客はギフトセットの注文で、店の人と詰め合わせを相談している。売り場のとなりは板場になっていて、子供のおもちゃがあるのは、家族用兼子づれの客のためのようだ。奥でチャリと白い上衣にコック帽の人がぞいた。戸口のわきの棚に写真が飾ってあって、頑固そうなひげらと、若い、あどけない顔がツーショットで写っている。元あどけない人が店主で、夫婦で十年ばかり前に製造・販売をはじめた。つづいてまたギフトセットの客がやってきた。真空パック技術のおかげで、季節を問わずおいしいドイツものを贈物にできる。

「百グラムでもいいですか？」

「もちろんです」

店主夫人兼売り子兼発送係は、まだ若々しい女性。炊きたてのごはんと同じで、ハム・ソーセージはつくりたてが一番旨いのだ。ドイツでは人は毎日、一日用を買いに行く。ついでにチーズウルストを百グラム。声が聞こえたのか、コック帽がこちらをのぞいた。問題はパンであって、



JR札沼線・新十津川駅と駅前広場

おいしいハム・ソーセージには、やはり焼きたてのパンが願わしい。店主夫人兼売り子がちよっぴりセツなそうに首を振った。何でもありのトウキョウではなく、石狩川のほとりの元開拓町なのだ。コンビニの棚で食パンを買って駅に向かった。

誰もいない、まっ赤な花の列と緑の繁み。白っぽい木箱のような無人駅。近くの病院のアナウンスのような声がして、それがとどえると、辺りはただしんとしている。

花壇のはしに腰かけ、食パンにハムをはさんで頬ばった。甘みのついたパンで、そのぶんハムの味わいが損われるが、かまわずパクパクいただいた。東京のわが家の近くに、ドイツで修業してきたヴルスト親父がいて、長らくなじみにしてきたが、勝るとも劣らない、いい味わいである。親父に食べさせたら、ここまでやるとはエライといって、大よろこびするだろう。そんなことを思いながら、またたくまにたいらげた。

腹がふくれると、ものうくなる。これから七時間ちかく「町民の町」で過ごすのは大変だ。早朝に札幌を発ち、終着で降り、町にいたのはたかだか三時間あまりなのに、長い一日を過ごした気分である。朝の出迎えの大鼓と幼児の踊りが夢のことのように思える。駅舎のうしろにのぞいているのは、午前の二便目として来て、午後一便でもどる一輛だろう。「とうきょう」の札を握って駆けてきた女の子は、おひるを食べているだろうか。

花壇の柵に寄つかかっていると、眠くなってきた。トック原野は、アイヌ語で「トックプト」といって、トックは凸起の意味、プトは川の入口のこと。いつも感心するのだが、アイヌ語は地形の特徴を簡明かつ正確にとらえている。

JRの運転手が頭の帽子に手をそえてやってきた。酔狂なひとり客に挨拶が送られているぐあいである。思いきりよく腰をあげた。

(いけうち おさむ)